

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## アパート空間での「もの」配列を通じた生活文化の解釈

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 熙奉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001857">https://doi.org/10.15021/00001857</a>

# アパート空間での「もの」配列を通した生活文化の解釈

李 熙奉

## 1 はじめに

大阪の国立民族学博物館主催「2002年ソウルスタイル」展で展示されたアパート空間での多様な事物を通して居住者の生活文化を解釈してみよう。生活財生態学を基礎とした展示のための緻密な調査の中で重要だと考えられるいくつかの「もの」を空間での配置を通して解釈しようとする。事物を通して考古学的解釈をしながら（実際は日本の考現学）、韓国での他の例とスライドを通して比較しながら、また発生学的歴史解釈を一部しようと思う。

このアパートはソウル江南の典型的な中産層アパートとして20年前頃建てられた35坪、片通路型3LDKアパートだ。

産業化を迎え伝統農耕社会の人口が都市に密集し、1970年代から単独住宅（一戸建て住宅）を抜け出し西洋に基礎をおく集合住宅形態が本格的に導入され、〈アパート〉が今は韓国で普遍的な住居として位置付けられている。韓国にはなかった西洋式の新しい住居形態が導入され、伝統生活様式と西洋の住居形態の摩擦が起こり、ある部分は妥協し、独自の発展し（または退歩し）、今日にいたっている。いまだ生活内容に合うように殻が進化しなければならない部分が途方もなく多いと考える。

事物の名称は当時の状況で付与された社会的分類体系だ。韓国式英語名称を原語と日本語と比較するのは面白い。韓国で標準語であるアパートの語源は英語の *apartment* だ。*Apartment* は共同住宅を意味し、反対語は単独住宅である *house* だ。韓国式の個人所有アパートは米国で *condominium* と呼ぶ。*Condominium* からきた韓国の「コンド」は休養地の多人数共同所有アパートに意味が変わった。韓国でのアパートは日本では大邸宅を意味する *mansion* ( mansion ) だ。住居を指称する言語は社会的産物であることが明らかだ。

## 2 進入部、通路空間の意味

通路型アパートで通路というのは多くの世帯が進入するための公共空間だ。この家では家の前の通路に文匣の上に四個の甕が置かれている(1173)。ふつう韓国食で必需な味噌、コチュジャン、醤油といった醬類、およびキムチが置かれる。通行のための公共空間に私的なものが占有するのは厳格な意味で不法だ。現在中上流層アパートではより取り締まりが厳しい。伝統農村社会が都市アパートに来ての生活文化の連続性をみせてくれている。比較的小型アパートで内部空間がぎっしりつまっているため家外にもののは

みだしている現象でもある。公共空間としての家の前が住民情緒上私的な領域と見なされる部分である。醬類の特性上、陽の光をあびなければならぬので、棟の前の花壇に個人チャントクデ<醬類の置き場>を作りもする。また例外的であるが、キムチの特性上土に埋めればよい味がでるため、棟の前の花壇に埋めたりもし、所によっては共同キムチ倉庫を作るところもある。規則と秩序を第一とする人には嫌な話だが、不法として取り締まりをするよりは匿名性、閉鎖性の非人間的な西洋志向型アパートをむしろ積極的に伝統生活を反映し、私的と公的空間が融通性のある互いに一部が混ざり合うのも未来の韓国型アパート設計の一つの方法でもあろう。

### 3 家族構成員の部屋の占有

この家は、おばあさん、夫婦、孫の三代が住み、普遍的な核家族の家ではない。三つの部屋の中でふつつ南向きの一番大きな部屋をアンパンといい、夫婦の寝室に使うが、この家ではおばあさんと孫の起居空間になっている。反面、通路に面した小さい部屋が（ふつつ子女の部屋として使われる）夫婦の寝室になっている。食堂に面した窓のない一番小さい部屋は子供の勉強部屋と書斎だ。その部屋は他の家ではふつつ子供たちが小さいときおもちの保管および遊び部屋、または服の保管部屋、または客用の部屋になる。

もっともよい大きい部屋は同時にアンパンとも呼ばれる。語源は明らかに異なる。アンパンは伝統社会の女性主人の空間を意味し、大きい部屋は単純に大きいという事実をいう。アンパンをおばあさんと孫に譲歩した理由を伝統的理由と実用的理由の二つから解釈してみよう。伝統儒教思想の両班住居では長幼有序の年長者中心であり、家によって差は少しあるが、アンパンはふつつ姑として一度入ったら、死んではじめて嫁に譲るという臥席終身の伝統が残っていたと見ることができる。また夫婦が夜の時間に使用するより、おばあさんと孫が昼夜間により多く使用するという実用的な考えをもとに、大きい部屋を割愛したと見ることができる。

したがって結果的に通路に面した小さい部屋が主人夫婦の部屋になってしまった（調査時名称でアンパンと混同して呼ばれている）。プライバシーのために共用通路と面した窓の外を眺められず、屏風ブラインドで塞いでいる（0551）。

伝統的に韓式の部屋に基本である箆笥は単純な収納よりは女性が結婚時に持ってくる婚帯<嫁入り道具>として、その家の顔という象徴性をもっていた。おばあさんの部屋の箆笥は（0358, 1340）伝統木彫り形態になっている反面、主人夫婦部屋の箆笥は単純な色合いの実用的形態にすでに変化している（0308）。夫婦部屋は寝台と化粧台（0136）を中心に完全に女性空間化した。かつて大主として舎郎棟で家を号令した家長である男性は、居室共用空間を除外すれば、ようやく一番小さい部屋、すなわち子供の勉強部屋に片隅の書斎を確保し（1452, 1611, 1682）、押し出され、儒教伝統生活の男性空間は消えて

しまった。したがって現代アパートは女性空間化し、家長の権威喪失と空間変化とは脈を共にする。

この家でおばあさんの部屋は子供たちと共用空間だ。コンピュータ+机と子供の二段ベッド (0783) がある。特異なのはおばあさんの部屋のベランダは、元来は外部空間として設計されたが、サッシをつけ内部空間化し、そのまま部屋の延長という点だ。ソファベッド (1104) があり、引き出し (0804) があり、文匣の上にテレビ (0916) がある。特にベランダのサッシにかけたレースのカーテン (1143) は、外部と半遮断する室内雰囲気演出し部屋の延長という点を明らかにしている。

台所の棚の木製祭器 (0892) とあわせて祭祀用屏風 (0578) は、奉祭祀という伝統が現代にも生きて息づいている両班の家であることをみせてくれる。屏風は日常空間を隠し新しい儀礼用特別空間を創出する可変型空間製造機となる。

#### 4 台所と食堂について

伝統韓式住居ではかまどの炊き口で暖房と炊事を兼ね、部屋にオンドルという部屋の床下にその熱を通過させる床暖房方式が普遍的だった。したがって台所の床が地面よりも低かった。

70年代初期住宅公社アパートでは伝統台所をそのまま引継ぎ、木の燃料を練炭にだけ代えた練炭式オンドルで建てた。在来型の座式、湿式の台所をとどめ、居室の板の間と壁で分離されていた。その後、70年代後半に公共機関で失敗した練炭ボイラーが民間で開発に成功し、台所の底が部屋の床と同じ高さにすることができた。上下二個の練炭の自然重力温水循環式ボイラーが(俗称セマウルボイラー)それだ。部屋と同じ高さの乾式床に立式シンク台とガスレンジが全国的に導入され始め、冷蔵庫が必需品化した。その前に建てたアパートはほぼ台所の床の高さ、立式シンク台(システムキッチン)設置、閉鎖された台所壁の取り壊しの改造工事をした。

この家での台所空間とももの配列を見ると、電子レンジ (0865)、浄水器 (0869)、煮沸洗濯機 (0651)、全自動洗濯機 (0804)、食器洗い機 (0838)、キムチ冷蔵庫がある。台所生活の便利のためこれまで新製品を果敢に購買してきたことが分かる。しかし一方、制限された既存の空間の枠の中で、新しい製品によって空間が占領され、活動空間が狭くなり、人間がむしろ道具に支配されることが見てとれる。旧アパートに新製品の導入行進はどこまで行くのか気になる。

この家は居室、食堂、台所のLDKであるが、それぞれが分離したL/D/Kだ。それにもかかわらず台所と食堂を連結する開口部を再びカーテン (1276) で半仕切っているのは、伝統住居の台所空間が女性空間として機能上はもちろん心理的にも外の人(すなわち男子たち)は遮られねばならないことを意味し、生きている「内外法」である。現

代に多く建てられた、KDL が一つの空間として開かれた西洋式アパートで女性空間を分離させようと L と DK の間を半透明ガラスで遮るインテリア補修センターがアパート団地の横で盛業中だ。

## 5 化粧室に関して

Bathroom を韓国で隠喩表現の化粧室と呼ぶ（日本はトイレットというが）。西洋標準の排泄用便器、洗面用洗面台、沐浴用浴槽の三つの衛生陶器が基本だ。西洋式衛生陶器で配列された移入化粧室は韓国人の生活ともっとも矛盾した空間だ。見た通り洗濯を化粧室です。台所に洗濯機があるが、手洗い用洗濯板と洗濯石鹸が基本として設置されている（1396）。浴槽上のカーテンかけ棒にかけられた洗濯干し用ハンガーを見ると（1382）、化粧室は洗濯室としての確固たる機能をもつ。それにもかかわらず洗濯のための設計配慮は全くない。

沐浴やシャワーを毎日しない韓国人に、足を洗うのは毎日夕方の必須行事だ。既存の洗面台と浴槽では足洗い作業がほぼ不可能なので、可変型小型浴槽である洗面たらい（1394）が生活必需品だ。直接調査した足洗い姿勢は数十になる。立って、または浴槽に腰掛けてシャワーで、便器に座って床のたらいで、またはお尻は居室の床につけて足は化粧室のたらいにつけるなどなど。たらいの材料が昔は真鍮、洋銀から、現在はプラスチックに変化定着した。たらいに水をうけるために洗面台の下に別途の蛇口を（0453）入居後に新設する。ふつう水を使いやすく蛇口にホースを連結する。

浴槽は韓国で若干の個人差はあるが沐浴用途にはあまり使用されない。沐浴は町内の銭湯（高級はサウナ）の熱い湯にしっかり入ってつかった後、外で垢をおとす。浴槽は狭く小さい子供の沐浴にのみ使用し、シャワーの時の水受け場になる。主な用途はむしろ断水対備の水タンク、キムジャンの時の白菜をかけるところ、洗濯物を水につけておくところ、毛布、布団を洗うところなどの用途だ。

排泄と沐浴はそれぞれ民族によって文化的に多様で独特だ。西洋近代建築で革命的な、もっとも機能的でなければならないという化粧室が矛盾だらけになってしまったのは、設計者が今も韓国人ふつうの人の現実の日常生活とは関係なく西洋式ハードウェアを外見にだけよく設置供給しているためだ。

## 6 その他

20 世紀初、近代西洋居室の中心であった壁暖炉（ペチカ）が次第に退化変化するように、世界共通に現代の居室で記る中心の神はテレビ（0218）だ。テレビに向かった椅子

式ソファ（0139）は確固とした位置を占めた。それにもかかわらず韓国人からは、公式的集まりでなければ、床に座りソファの端に背中をもたれて座式姿勢を多くみることができる。

居室のピアノと音楽関連の本とレコードは趣味の水準を越えた主人の趣向を見せてくれる。

居室ベランダにある文箱の上の陶磁器（1291）と、米びつ（1282）は外部であるベランダが内部空間化したことをみせる。

それでも必ずどの家でもあるよく手入れされたベランダの花瓶（1333）は、殺伐としたアパートのコンクリート白色空間で外部の自然を導入しようという強烈的な欲求をみせる。

## 7 おわりに

民族学博物館で肝胆を寒からしむほどに緻密に調査し展示した「2002年ソウルスタイル」のアパートはあまりにも多くのものをみせてくれており、ものの後ろに隠れている、ものが語る話があまりにも多い。短い時間を利用し、足りないが、その中の空間占有上比較的目につくものについて客観をもとにした主観的解釈を試みた。ものほどではないが、生活は複雑で多様だ。チプという殻とその内に住む人々の暮らしはかけ離れた二つではないが、世界共通に建築設計者は形態的動物であり内容より外形に関心を集中し人間の暮らしが疎外されてしまう。

一部文化自体が変わらないものではないが、どんなに世界化を叫び、現代化したといっても、ふつうの人々の伝統文化の根は執拗だ。日本が時期的に少し進んでいるが、韓国も似たように、かつて経験できなかった西洋元祖の共同集合住居を導入するようになったが、こうした展示を始発にし、東アジアにおける西洋文物の導入過程と現在までの結果はもちろん、文化の差がある韓国と日本両者の同じ点と異なる点、また成功と失敗を赤裸々に比較してみれば真に住民に合う家を建ててあげるのにとても有益であろう。討論を通してよい意見を分かちあえることを期待する。

## 8 追加——展示とシンポジウムを終えて

ほんとうに有益な展示観覧とシンポジウム参加であった。簡略に元の原稿に所感を付け加える。

展示に関して

大阪の民博の驚くほど緻密な企画による新しい展示であった。チプの構造はもちろん、使用していたもののすべてを移して来て、一つ一つのものを通して生活をありのままに

みせていた。またチブ一つのみならず、チブを中心に外郭の教室、市場、故郷、墓などの生活をもみせる展示は画期的な試みと思った。

一つ目についた残念なことは展示品目としてチブのみを選んだため、「チブ」という個別空間と「チブの集合」の間の空間（すなわち集合住居の外部空間）をみせられずにいる。本稿の2章で「進入部通路空間の意味」が重要な部分であると述べたが、展示では進入部通路全体が漏れており、展示場でチブの外に出ている甕の意味を持たせず、通路形式のアパートで「公的空間の私的占有」が説明されずにいる（写真1）。展示場の制約のためであろうが、すべての部屋に入れるようにしたため進入の手続き、すなわち公的空間から私的空間に転移する過程がおろそかに扱われてしまった。

同じように、入り口の反対にあるベランダ側もアルミニウムサッシのガラス壁が省略されてしまったため、チブの外とチブの内の境界が失われてしまった。本稿6章「その他」で言及した「外部であるベランダ空間の内部化」や「部屋の外部への延長」の意味伝達が難しくなった（写真2）。

#### シンポジウム後

もの全体を調査する生活財生態学ないしは考現学の調査方法の話題に集中した。討論者たちに欠けていたのは調査の目的によって方法が異なるという点である。ものの全数調査は完璧に近い緻密なものであり、この展示に適合した方法であろう。また他の学問分野や異なる展示で応用できる可能性は多いだろうが、研究時間と人力と資金という問題で学問の普遍的方法としては難しさがある。

方法論上のもう一つの問題は、すべてのものをみせれば「もの自身が語ってくれる」という仮定に基づいているが、文化圏が異なれば意味伝達にならない。ものを見る人の文化の範疇で理解してしまい、ものの生産者（あるいは消費者）の観点からは見にくい。すなわち内部人の観点（emic）に入れず、人類学で避けようとする外部人の観点（etic）にとどまってしまう。ぼうだいな分量のもののデータにもかかわらず、それは資料であるのみということである。学問では「資料の解釈」を通して「文化の意味」の伝達がより大きく浮き彫りにされる。

次に生活文化についてである。日本の学問の特性とみられる細分化、専門化により位置を占めた「生活文化」は過剰単語（redundancy：冗長）であると考えている。人類学の初期の大家たちは文化を研究するため日常生活の些細なものまでもすべて資料として収集した。

「文化」は言葉や観念としてのみならず、ものとともに「全体（wholeness）」として成立するからだ。MalinowskiをみてもLevi-Straussをみてもそうである。文化にはすでに生活文化が入っている。筆者がわかりやすい現場研究方法論として使用するSpradleyの方法にも、文化は「言葉、行動、もの」の三つが結合しなければならないと明らかにしてい



写真1 通路形式のアパート侵入部の私的占有



写真2 ベランダサッシの設置による内部化



る。ただ韓国や日本の人類学者が、ものを抜かして観念に重きを置いた研究をしてきたという誤った伝統のため、新たに「生活文化」という分野を作らねばならなかったのではないかと考えてみた。生活文化の方法を新たに開拓するよりは基本に戻り、文化の方法に忠実であれば、カタログ状態にとどまっているだけでない、生活文化がはっきりとあらわにされると思う。

## 文 献

朝倉敏夫・佐藤浩司編

2002 『2002年ソウルスタイル』千里文化財団。

李熙奉

1986 「私達の生活様式と子女の住居形態——現実から出発した住居設計」  
『大韓住宅公社論文集』47号。

李熙奉他

1991 「韓国人の生活様式に合う住居形態設計のための現場研究」  
『大韓建築学会論文集』7巻2号。

李熙奉他

1994 「韓国人の食文化に適合する台所空間設計のための現場研究」『環境科学研究』中央大。

James Spradley

1980 *Participant Observation* New York: Holt, Rinehart and Winston.

# 아파트 공간에서의 「사물」 배열에서 본 생활문화

이 희봉

## 1 시작에

오사까 국립민족학박물관 주최 「2002 년 서울 스타일」 전에서, 전시된 아파트 공간에서의 다양한 사물을 통해 거주자의 생활문화를 해석해 보고자 한다. 生活財生態學을 바탕으로 한, 전시를 위한 치밀한 조사 안에서 중요하다고 생각되는 몇 개의 물건들을 공간에서의 배치를 통하여 해석하고자 한다. 사물을 통하여 고고학적 해석을 하면서 (실제는 일본 考現學) 한국에서의 다른 예와 슬라이드를 통하여 비교하면서, 또한 발생학적인 역사 해석을 일부 하고자 한다.

이 아파트는 서울 강남의 전형적인 중산층 아파트로서 20 년 전쯤 지어진 35 평 편복도형 3LDK 아파트이다.

산업화를 맞이하여 전통 농경사회의 인구가 도시에 밀집하면서, 1970 년대부터 단독주택에서 벗어난 서양에 바탕을 둔 집합주거 형태가 본격적으로 도입되어 이제는 한국에서 보편적인 주거로 자리잡았다. 한국에는 없던 서양식의 새로운 주거형태가 도입되면서 전통생활 양식과 서양 주거형태의 마찰이 일어나며 어느 부분은 타협하며 독자적으로 발전하여 (또는 퇴보하면서) 오늘에 이르게 된다. 아직도 생활 내용에 맞게 껍질이 진화해야할 부분이 엄청나게 많다고 생각한다.

사물의 명칭은 당시 상황에서 부여된 사회적 분류 체계이다. 한국식 영어 명칭을 원어와 일본어와 비교하는 것은 재미있다. 한국에서 표준어인 아파트의 어원은 영어의 apartment 이다. Apartment 는 셋집 공동주택을 의미하고 반대말은 단독주택인 house 이다. 한국식의 개인 소유 아파트는 미국에서 condominium 이라 부른다. Condominium 에서 온 한국의 ‘콘도’는 휴양지의 다인 공동 소유 아파트로 뜻이 바뀌었다. 한국에서의 아파트는 일본에서 대저택을 의미하는 만손 (mansion) 이다. 주거를 지칭하는 언어는 사회적 산물임이 분명하다.

## 2 진입부 복도공간의 의미

복도형 아파트에서 복도란 여러 세대의 진입을 위한 공공공간이다. 이 집에서는 집 앞 복도에 문갑위 4 개의 단지가 놓여있다. (1173) 보통 한국 음식에서 필수인 된장, 고추장, 간장의 장류 및 김치 단지가 놓인다. 통행을 위한 공공공간을 사적 물건이 점유하는 것은 엄격한 의미에서 불법이다. 현재 중상류층 아파트에서는 보다 단속이

심하다. 전통 농촌사회가 도시 아파트로 오면서 생활문화의 연속성을 보여주는 것이다. 비교적 소형아파트에서 내부공간이 팍 참으로 인하여 집밖으로 물건이 밀려나가는 현상이기도 하다. 공공공간으로서의 집 앞이 주민정서상 사적인 영역으로 간주되는 부분이다. 복도는 그 외에도 집안에서 빠져나온 사적인 허드레 물건의 보관장고 역할도 한다. 장류의 특성상 햇빛을 보아야 하므로 동 앞에 개인 장독대를 만들기도 한다. 또 예외적이지만, 김치의 특성상 땅에 묻어야 제맛이 나므로 동 앞 화단에 묻기도 하며, 곳에 따라서 공동 김치광을 만든 곳도 있다. 규칙과 질서를 제일로 하는 사람들은 질책을 할 이야기이지만, 불법으로서 단속하는 것 보다 익명성, 폐쇄성의 비인간적인 서구지향형 아파트를 오히려 적극적으로 전통생활을 반영하여 사적과 공적 공간이 융통성 있게 서로 일부 섞이게 하는 것도 미래 한국형 아파트 설계의 한 방법일 것이다.

### 3 가족 구성원의 방의 점유

이 집은 할머니, 부부, 손자 3대가 사는, 보편적인 핵가족 집은 아니다. 3개의 방중 보통 남향의 제일 큰방을 안방이라 하여 부부침실로 쓰나 이 집에서는 할머니와 손자의 기거공간으로 되었다. 반면, 복도에 면한 작은방이(보통 자녀방으로 쓰이는) 부부침실로 되었다. 식당에 면한 창 없는 제일 작은 방은 아이들 공부방과 서재이다. 그 방은 다른 집에서는 보통 아이들이 작을 때 장난감 보관 및 놀이방, 또는 옷 보관방, 또는 손님용 방이 된다.

가장 좋은 큰방은 동시에 안방으로도 불린다. 어원은 분명히 다르다. 안방은 전통사회의 여성 주인의 공간을 의미하고 큰방은 단순히 크다는 사실을 말한다. 안방을 할머니와 손자에게 양보한 이유를 전통적 이유와 실용적 이유 두 가지로 해석해 본다. 전통유교사회의 양반주거에서는 장유유서의 연장자 중심이고, 지방에 따라 차이는 좀 있지만 안방은 보통 시어머니로서 한번 들어가면 죽어서야 며느리에게 물려준다는 臥席終身의 전통이 남아있다고 볼 수 있다. 또한 부부의 밤시간 사용보다 할머니와 손자들이 주야간 더 많이 사용한다는 실용적인 생각을 바탕으로 큰방을 할애했다고 볼 수 있다.

따라서 결과적으로 복도로 면한 작은방이 주인 부부방이 되어 버렸다. (조사시 명칭에서 안방으로 혼동되어 불리기도 함). 프라이버시 때문에 공용 통로와 면한 창밖을 내다보지 못하고, 가리게 블라인드로 막혀있다. (0551)

전통적으로 한식 방에 기본인 장농은 단순 수납보다는 여성이 결혼시 가지고 오는 혼수감으로서 그 집의 얼굴이라는 상징성을 가지고 있었다. 할머니 방 장농은 (0358, 1340) 전통 목각 형태로 되어있는 반면, 주인 부부방의 장농은 단순 색상의 실용적

형태로 이미 변화하여 있다. (0308) 부부방은 침대와 화장대 (0136) 중심으로 완전 여성공간화 하였다. 옛적에 大主로서 사랑채에서 집안을 호령하던 가장인 남성은 거실 공용공간을 제외하면 겨우 제일 작은방, 즉 애들 공부방에 귀퉁이 서재를 확보하며 (1452, 1611, 1682) 밀려나면서, 유교 전통생활의 남성 공간은 사라져 버렸다. 따라서 현대 아파트는 여성공간화 하였고 가장의 권위상실과 공간변화와 맥을 같이한다.

이 집에서 할머니 방은 애들과의 공용공간이다. 컴퓨터+ 책상과 애들 2 층 병커 침대 (0783) 가 있다. 특이한 것은 할머니방 베란다는 원래는 외부공간으로 설계되었지만 샷시를 하여 내부공간화 하고 그대로 방의 연장이라는 점이다. 소파베드 (1104) 가 있고, 서랍장이 있고 (0804) 문갑위 TV 가 있다 (0916). 특히 베란다 샷시에 친 레이스 커튼은 (1143) 외부와 반 차단하는 실내분위기를 연출하여 방의 연장이라는 점을 분명히 하고있다.

부엌 선반의 목제기와 (0892) 더불어 제사용 병풍은 (0578) 봉제사라는 전통이 현대에도 살아 숨쉬고 있는 양반 집임을 보여준다. 병풍은 일상 공간을 가리고 새로운 의례용 특별 공간을 창출하는 가변형 공간 제조기인 셈이다.

#### 4 부엌과 식당에 대하여

전통 한식주거에서는 부뚜막 아궁이에서 난방과 취사를 겸하였고, 방에 구들이라 하여 방바닥 아래에 그 열을 통과하게 하는 온돌난방 방식이 보편적이었다. 따라서 부엌 바닥이 지면보다도 낮았었다. 70 년대 초기 주택공사 아파트에서는 전통부엌을 그대로 이어받아 나무연료를 연탄으로만 바꾼 연탄식 구들로 지었다. 재래형의 좌식, 습식의 부엌을 두었고 거실 마루와 벽으로 분리되어 있었다. 그 후 70 년대 후반에 공공기관에서 실패한 연탄보일러가 민간에서 개발에 성공하여 부엌 바닥이 방바닥과 같이 높아질수 있었다. 상하 2개 연탄의 자연 중력 온수 순환식 보일러가 (속칭 새마을 보일러) 그것이다. 방과 같은 높이의 건식 바닥에 입식 싱크대와 가스레인지가 전국적으로 도입되기시작하고 냉장고가 필수품화 되었다. 그 전에 지은 아파트들은 거의 부엌바닥 높이기, 입식 싱크대 (시스템 키친) 설치하기, 폐쇄된 부엌벽 허물기의 개조공사를 하였다.

이 집에서의 부엌공간과 물건의 배열을 보면, 전자레인지 (0865), 정수기 (0869), 삶는 세탁기 (0651), 전자동 세탁기 (0804), 식기 세척기 (0838), 김치냉장고가 있다. 부엌생활의 편리를 위해 지금까지 신제품들을 과감히 구매해 나간 것을 알수 있다. 그러나 한편, 제한된 기존 공간의 틀 속에서 새 제품들에 의해 공간이 점령당하여 활동공간이 좁아지고, 인간이 오히려 도구에 지배됨을 볼 수 있을 것이다.

구아파트에 신제품의 도입 행진은 어디까지 갈 것인가가 궁금하다.

이 집은 거실 식당 주방의 LDK이지만 각각이 분리된 L/D/K이다. 그럼에도 불구하고 부엌과 식당을 연결하는 개구부를 다시 커튼으로 (1276) 반막이 한 것은 전통 주거의 부엌공간이 여성공간으로서 기능상은 물론 심리적으로도 바깥사람들과는 (즉 남자들) 가려져야 함을 의미하는, 살아있는 '내외법' 인 셈이다. 현대에 많이 지어진, KDL 이 한 공간으로 트여진 서양식 아파트에서 여성공간을 분리시키고자 L 과 DK 사이를 반투명 유리문으로 막는 인테리어 보수 센터가 아파트 단지 앞에서 성업중이다.

## 5 화장실에 관하여

Bathroom 을 한국에서 은유 표현의 化粧室이라 부른다. (일본은 토일렛이라 하지만.) 서양 표준의 배설용 변기, 세수용 세면기, 목욕용 욕조의 세 개의 위생도기가 기본이다. 서양식 위생도기로 배열된 移入 화장실은 한국인 생활과 가장 모순된 공간이다. 보다시피 빨래를 화장실에서 한다. 부엌에 세탁기가 있지만 손빨래용 빨래판과 빨래비누가 기본으로 설치되어 있다. (1396) 욕조위의 커튼 길이 봉에 걸린 빨래 말리기용 옷걸이를 보면 (1382), 화장실은 세탁실로의 확고한 기능을 갖는다. 그럼에도 불구하고 빨래를 위한 설계 배려는 전혀 없다.

목욕이나 샤워를 매일 하지는 않는 한국인에게 발씻기는 매일 저녁의 필수 행사이다. 기존 세면기와 욕조로는 발씻기 작업이 거의 불가능하므로 가변형 소형 욕조인 세숫대야가 (1394) 생활 필수품이다. 직접 조사한 발씻기 자세는 수십가지가 된다. 서서 또는 욕조에 걸터앉아 샤워 뿌리개로, 변기에 앉아서 바닥 세숫대야에, 또는 엉덩이는 거실 바닥에 붙이고 발은 화장실의 세숫대야에 담귀서 등등. 세숫대야의 재료가 예전에는 놋쇠에서, 양은에서, 현재에는 플라스틱으로 변화 정착 되었다. 세숫대야에 물을 받기위해서 세면기 밑에다가 별도의 꼭지를 (0453) 입주 후에 신설한다. 보통 물쓰기 좋게 꼭지에 호스를 연결 한다.

욕조는 한국에서 약간의 개인차는 있지만 목욕 용도로는 잘 사용되지 않는다. 목욕은 동네 목욕탕 (고급은 사우나) 의 뜨거운 탕에 폭 들어가 불린후 밖에서 때미는 목욕을 한다. 욕조는 좁아서 작은 아이들 목욕에만 사용하고 샤워시 물받이 판이 된다. 주 용도는 오히려 단수 대비 물탱크, 감장시 배추 절이는 곳, 빨래 담귀서 때불리는 곳, 담요, 이불 빼는 곳 등의 용도이다.

배설과 목욕은 그야말로 민족에 따라 문화적으로 다양하고 독특하다. 서양 근대건축에서 혁명적인, 가장 기능적이어야 할 화장실이 모순 투성이가 되어버린 것은 설계자가 지금도 한국인 보통사람들의 현실의 일상생활과는 무관하게 서양식 하드웨어를 보기에만 좋게 설치 공급하고 있기 때문이다.

## 6 기타

20 세기초 근대 서양 거실의 중심이었던 벽난로가 점차 퇴화 변화하듯이, 세계공통으로 현대 거실에서 모시는 중심의 신은 TV이다 (0218). TV를 향한 의자식 소파는 (0139) 확고히 자리잡았다. 그럼에도 불구하고 한국인들에게서 공식적 모임이 아니면, 방바닥에 앉아 소파 끝에 등을 기대는 좌식 자세를 많이 볼 수 있다.

거실의 피아노와 음악 관련 책과 음반은 취미 수준을 넘은 주인의 취향을 보여준다.

거실 베란다에 있는 문갑위 도자기는 (1291)와 쌀통 (1282)은 외부인 베란다가 내부공간화 하였음을 보여준다.

그럼에도 반드시 어느 집이나 있는 잘 가꾸어진 베란다 화분들은 (1333) 삭막한 아파트 콘크리트 회색공간에서 외부의 자연을 도입하려는 강렬한 욕구를 보여준다.

## 7 마치면서

민족학박물관에서 간담이 서늘할 정도로 치밀하게 조사하여 전시한 2002 서울 스타일 아파트는 너무도 많은 것을 보여주고 있고 물건 뒤에 숨어있는, 물건이 말하는 이야기가 너무도 많을 것이다. 짧은 시간을 이용하여 모자라지만 그중 공간 점유상 비교적 눈에 띄는 물건들을 객관을 바탕으로 한 주관적 해석을 시도하였다. 물건만큼이나 생활은 복잡하고 다양하다. 집이라는 껍데기와 그 안에 사는 사람들의 삶은 동떨어진 두개가 아닌데, 세계 공통으로 건축설계자들은 형태적 동물이라서 내용보다는 외형에 관심을 집중하여 인간의 삶이 소외되어버린다.

일부 문화 자체가 변화하지 않는 것은 아니지만, 아무리 세계화를 부르짖고 현대화한다고 하여도 보통사람들의 전통문화의 뿌리는 집요하다. 일본이 시기적으로 조금 앞서지만 한국도 비슷하게, 일찌기 경험해보지 못한 서양 원조의 공동집합주거를 도입하게되는데, 이러한 전시를 시발로 하여 동아시아에서의 서양 문물의 도입의 과정과 현재까지의 결과는 물론 문화의 차이가 있는 한국과 일본 양쪽의 같은 점과 다른점 또 성공과 실패를 적나라하게 비교해 본다면 정말로 주민에게 맞는 집을 지어주는 데에 아주 유익할 것이다.

토론을 통하여 좋은 의견을 나눌수 있기를 기대한다.

## 8 추가——전시와 심포지움을 마치고

참으로 유익했던 전시 관람과 심포지움 참가였다. 간략히 원래 원고에 소감을

덧붙인다.

### 전시에 관하여

오사가 민박의 놀라울 정도로 치밀한 기획에 의한 새로운 전시였다. 집의 구조는 물론 사용하던 물건 전부를 옮겨와서 하나하나의 물건을 통하여 생활을 그대로 보여주고 있다. 또한 집 하나 뿐만 아니라 집을 중심으로 외곽에 교실, 장터, 고향, 군대, 제사 등의 생활을 다시 보여주는 전시는 획기적 시도로 보였다.

하나 눈에 띄는 아쉬운 점은 전시품목으로 집만을 택함으로써, “집”이라는 개별공간과 “집들의 집합” 사이의 매개공간 (즉 집합주거의 외부공간) 을 보여주지 못하고 있다. 본 원고 2 장에서 “진입부 복도공간의 의미” 가 중요한 부분임에도 전시에서는 진입부 복도 자체가 누락되어 있어서 전시장에서 집밖에 나와있는 장독이 의미를 갖지 못하며, 갯복도 형식의 아파트에서 “공적 공간의 사적 점유” 가 설명되지 못하고 있다 (사진 1) . 전시장 제약 때문이겠지만 모든 방으로 들어갈 수 있게 함으로써 진입의 절차, 즉 공적 공간에서 사적 공간으로 전이하는 과정이 소홀히 다루어졌다.

마찬가지로, 입구 반대편인 베란다 쪽도 알미늄 샷시 유리 벽이 생략됨으로써 집밖과 집안의 경계가 사라져 버렸다. 본 원고 6 장 “기타” 에서 언급한 “외부인 베란다 공간의 내부화” 나 “방의 외부로의 연장” 의 의미전달이 어렵게 되었다 (사진 2) .

### 심포지움 후

물건 전체를 조사하는 생활재생태학 내지는 고현학의 조사방법이 화제를 집중시켰다. 토론자들이 놓치는 것은 조사의 목적에 따라서 방법이 다르다는 점이다. 물건 전수조사는 완벽에 가까운 치밀함이 있으나 이 전시에 적합한 방법이라는 것이다. 타 학문 분야나 다른 전시에서 응용 가능성은 많겠으나 연구 시간과 인력과 돈이라는 문제에서 학문의 보편적 방법으로는 어려움이 있다.

방법론상 또 다른 문제는, 모든 물건을 보여주면 “물건 스스로가 말할 것이라는 가정” 에 바탕을 두고 있으나 문화권이 달라지면 의미 전달이 되지 않는다. 물건을 보는 사람의 문화에 익숙한 범주에서 이해해 버리고 말지 물건의 생산자 (또는 소비자) 의 관점에서 보기 힘들다. 즉 내부인 관점 (emic) 으로 들어가지 못하고 인류학에서 피하려는 외부인관점 (etic) 에 머물게 된다. 즉 엄청난 분량의 물건 데이터에도 불구하고 그것은 자료일 따름이라는 것이다. 학문에서는 “자료의 해석” 을 통하여 “문화의 의미” 의 전달이 더 크게 부각된다.



사진 1 갯복도형 아파트 진입부의 사적 점유



사진 2 베란다 샤워 설치에 의한 내부화



다음으로 생활문화에 대하여서이다. 일본학문의 특성으로 보이는 세분화, 전문화에 의하여 자리 잡은 “생활문화”는 과잉단어라고 (redundancy : 冗長) 생각한다. 인류학 초기 대가들은 문화를 연구하기 위하여 일상생활의 사소한 물건까지도 다 자료로서 수집하였다. “문화”는 말이나 관념으로서 만이 아니라 물건과 함께 “전체(wholeness)”로 성립하기 때문이다. Malinowski 를 보나 Levi-Strauss 를 보아도 그러하다. 문화에는 이미 생활문화가 들어가 있다. 필자가 알기쉬운 현장연구 방법론으로 사용하는 Spradley 의 방법에도 문화는 “말, 행동, 물건”의 3자가 결합해야 됨을 잘 나타내 주고 있다. 다만 한국이나 일본의 인류학자들이 물건을 빠뜨리고 관념에 치중된 연구를 해왔던 잘못된 전통때문에 새로이 “생활문화”라는 분야를 만들어야하지 않았을까 생각해본다. 생활문화의 방법을 새로이 개척하기 보다는 기본으로 돌아가 문화의 방법에 충실한다면, 카탈로그 목록상태로 머물러 있지 만은 않은, 생활문화가 잘 드러나리라고 본다.

## 문헌

朝倉敏夫·佐藤浩司編

2002 『2002 서울 스타일전』 国立民族学博物館.

이희봉

1986 「우리네 생활양식과 저네의 주거형태——현실에서 출발한 주거 설계」 『대한주택공사 논문집』 47 호.

이희봉, 이규성, 우동주

1991 「한국인의 생활양식에 맞는 주거 형태 설계를 위한 현장연구」 『대한건축학회 논문집』 7 권 2 호.

이희봉, 김지은

1994 「한국인의 식문화에 적합한 부엌공간 설계를 위한 현장연구」 『환경과학연구』 중앙대.

James Spradley

1980 *Participant Observation*. New York: Holt, Rinehart and Winston.